

# 告諭

今、私たちは多くの困難と不安に直面し、その生き方が問われています。新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、多くの尊い命が失われ、人びとは深い混迷の中にいます。国際紛争や内戦、貧困・差別・格差・いじめ・命を奪う事件などの社会問題、近年頻発する自然災害・地球環境の変動などは、私たちに生存の危機をもたらしています。

一仏兩祖のみ教えに生きる私たちは、どのような生き方を目指せば良いのでしょうか。お釈迦さまは智慧と慈悲をもって生きることを示されました。智慧とは万物に生かされている生命の真理に気づく力です。慈悲とは限りないつくしみの心をもって人びとの苦しみを除き安楽に導くことです。この時、私たちはさまざまな立場を認め合いながら、寛容になれるのです。

瑩山禅師は「たとい難値難遇の事有るも、必ず和合和睦の思いを生ずべし」と示され、人びとの悲しみも苦悩も我が事のように受け止め、相和して生きることをお説きです。

本年も四摂法の「同事」を実践の柱として、分かち合い、支え合い、思いを重ね合って、人と人との繋がりを深めてまいりましょう。

道元禅師は「この法は、人人の分上にゆたかにそなわれりといえども、いまだ修せざるにはあらわれず」と示され、み教えを、ていねいに日々の生活の中に生かしていくことをお諭しです。

仏さまに手を合わせ、坐禅に親しみ、世界中の人びとが誰一人取り残されることなく、安らかに暮らせるよう、祈り、念じ、皆ともに菩薩行を進めてまいりましょう。

いよいよ明年、大本山總持寺開山太祖瑩山紹瑾禅師七〇〇回大遠忌が奉修されます。この遭い難きご法縁を感謝しともどもにご信心をさらに深めていただくことを願ってやみません。

合掌

南無釈迦牟尼仏

南無高祖承陽大師道元禅師

南無太祖常濟大師瑩山禅師

令和五（二〇二三）年四月一日

曹洞宗管長

石附周行

いしづき しゅうこう



## つながりあっている世界

私たちを取り巻くこの世の中は、益々混沌とした先の読めない状況になってきているように感じられます。このような時代だからこそ、私は「縁起の理」を説く仏教のものの考え方を拠り所にすることが重要なのではないかと考えております。

『華嚴経』というお経の中に「すべての存在は、お互いに関わりあい助け合いながら存在している」という縁起の理を巧みに表現した「因陀羅の網」という比喻があります。因陀羅とはフーテンの寅さんでも知られる「帝釈天」のことです。もともと帝釈天はバラモン教やヒンドゥー教などの神さまでしたが、仏教に取り入れられ、仏法の守り神になりました。

この教えを私なりに解釈して、帝釈天が地球に大きな網をかけたと考えます。地球をすっぽり覆うほどの巨大な網が下りて、私たち一人ひとりにかかったと思ってください。

一つの網目の動きが周りのすべての網目に影響を与えていき、全ての網目の動きが一つの網目にも影響を及ぼしてくるようになります。つまり、すべての人々や物は関わりあって地球上に存在しているといえます。また、一つひとつの網目が集まって全体を作り上げている、つまり、一人ひとりの行動が周りの人々や物に影響を与え、ひいては地球全体に影響を及ぼしていくと考えるのです。

先日、雪の晴れ間に外へ出てみると、境内の紅白の梅の木々がつぼみを膨らませておりました。その時、私はふと思ったのです、「この梅の木は大地から栄養をもらって今花を咲かそうとしている。同じように私たち人間は大地から育ったお米や野菜を頂いて生かされている。梅の木も私も大地とつながっているのだ」と。そう思うと、一本の梅の木に対しても、愛おしさを禁じえませんでした。

このようにつながりで物事を捉えるのが縁起というものです。そして、それを自覚することが智慧であり、そのことを自覚すると、他に対する慈しみの心が沸々と湧き上がってくるのです。一人ひとり小さな存在かもしれませんが、そんな思いを結集して明るい世の中を作っていきたいものです。

新潟県東龍寺 渡邊宣昭

曹洞宗 宗務庁 教化部 布教課

〒一〇五―八五四四

東京都港区芝二―五―二

電話〇三(三三四五四)五五六〇

令和五年四月一日初版発行



# 告諭

開 経 偈

無上甚深微妙法。

百千万劫難遭遇。

我今見聞得受持。

願解如来真實義。